

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 19 日現在

機関番号：32663

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2011～2015

課題番号：23300233

研究課題名(和文) 武道の変容メカニズムに関する研究

研究課題名(英文) study on acculturation of traditional martial arts in Japan

研究代表者

木内 明 (Kiuchi, Akira)

東洋大学・ライフデザイン学部・准教授

研究者番号：70298181

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は武道のような伝統文化が海外に伝播する過程で変容する際のシステムのパターンを、実際に海外で実践されている武道や武術を現地におけるフィールド調査によって情報を収集し、明らかにしようとしたものである。具体的には日本からブラジルに伝わり、さらに日本に再伝播した柔術や、東南アジアで行われている柔道や空手、そして中国で発祥し世界に広がった武術を調査対象として取り上げた。それら文化移動に伴う変容理論の構築を目指した。

研究成果の概要(英文)：Oriental martial arts have been spread all over the world and played in many countries. But the techniques and concepts the martial arts used to have in their original culture had been changed and practiced in very different ways. This study was designed to find the theoretical pattern of acculturation that techniques and concepts of martial arts transform when they are accepted in foreign countries.

研究分野：anthropology

キーワード：武道 変容

1. 研究開始当初の背景

武道はそれが伝えられてきた社会に固有の文化を多分に内包したスポーツ文化であることから、たとえ国際化しても、その変容は比較的緩やかなものであろうと考えられてきた。しかし、近年、海外に伝播した武道が国際化の波を受け、従来とは大きく姿を変えろといった状況が見られる。たとえば、ルールや道具に日本の精神性を強く反映している「柔道」から競技スポーツの「JUDO」へと移り変わってきたという現象はその一例である。ところが、同じように国際化しつつも弓道のようにあまり変化の兆しを見せない場合もある。つまり国際化しても、その社会状況や武道の特性によっては、必ずしも変化を伴わない場合も存在し、このことは同時に大きな変化の可能性も示唆しているのである。

2. 研究の目的

スポーツの地球規模の広がり、スポーツを行う当事者たちの意識の如何を問わず、それが中心的国家ないし組織において、存在自体が大きな政治的権力と化し、そこに包摂される周縁部の国家ないし組織は、世界的なスポーツ文化と接合することによって従属関係を強いられるという構造を生み出している。しかし、地域研究が進められていく中で、従属関係が結ばれる過程においても、単純な受容や画一化の進展といった一方的な影響関係ではなく、相互の浸透や流用、あるいは拒絶といった状況が生まれていることが確認され、さらには、個別の文化変容を引き起こし、それが元々の発祥の地にカウンターカルチャーとして、変容を迫るような動きさえ見られるようになった。

研究者は当初、対象となるスポーツの組織やそれを担う社会の社会構造といったものに注目した。ところが、こうしたスポーツを

取り巻く社会状況のみを明らかにするにとどめず、スポーツそのものの構造や身体技法と連動させることで、より豊かなスポーツの世界を描き出すことが可能となり、これがギアツの言う「厚い記述」につながるのではないかと考えるにいたった。

そこで本研究では、それぞれの社会固有の文化が色濃く内包されていると考えられている武道や武術を対象にした。伝統と形容される武道や武術が社会的・文化的・政治的に異なる地域に伝播し、受容された後にどのような文化変容を引き起こし、それが伝播の中心地との関係性の中でどのように微調整されてきたのか、といった点に注目する。その上で、国家間やスポーツ組織間の動的な関係も含め、武道や武術の技術の変容までも視野に納めたスポーツ人類学的な思考に基づいた「民族誌的記述分析」を行い、現代社会における武道の変容メカニズムを明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では期間を5年とし、この間に対象とする地域の武道や武術の史・資料の収集ならびに分析を行うことで、地域社会に固有の武道の状況を浮き彫りにした。具体的な研究対象としては、柔術、空手、そして中国武術が中心となる。国際組織成立以前に周縁部に伝播し、定着したそれら日本の武道や中国の武術は、現地の文化と習合することで翻訳的適応や土着化をおこしている。その後、国際組織が成立し、そこで基準化された方法(運動形態やルールあるいは運動に対する評価など)が伝えられることによって、伝統スポーツそのものが変容した事例もある。このような変容は時に、いくつかの方向性を持つ場合もあり、それは伝統スポーツの実践者たちの価値意識によって決定する。したがって、本研究ではこうした実践者たちの価値意識を掘り上げていく作業が研究の中心となる。

こうした研究目的を果たすための方法論が参与観察を中心にした「フィールドワーク」である。また、人々の認識に焦点を当てることからすると、フィールドワークは、ある程度、長期間にわたって実施されることになる。

4. 研究成果

研究成果の一つとして、日本からブラジルに渡り、現地で質的な変容を遂げた柔術の変容から、一つの変容パターンのようなものと、それをもたらす要因が考察された。日本にて伝承されて来た柔術の中の一流派がブラジルに伝わり、日本の柔術とは隔絶された環境で長い年月をかけて実践的に行われ、一般的に「グレーシー柔術」や「ブラジリアン柔術」と呼ばれる新種の柔術へと変容した。現在では、変容前の柔術とは共通のルールのもとでは戦うことが難しいほど異なった格闘技に変容している。柔術がある程度、ルールや道具といった格闘する上での環境的を整えた上で行われていたが、グレーシー柔術は、条件にとらわれない、より実践的な形式で多彩な技が認められている。そこに確認される変容をもたらした要因の一つは、文化のオリジナルである権威が有した文化的意味の喪失、あるいはそれに伴う価値の喪失である。日本から遠く離れた社会において、日本文化と接点のない人々の間で実践されるにあたり、日本の固有文化ということに価値を見出し難くなったときに、その伝統的な技法に固執する必要はなくなり、技法や道具等に改良が積極的に加えられていったのである。

そのようなオリジナルな文化的枠組みから開放された変容という意味においては、ベトナムに伝わり、現地の人々の間で実践されている空手も同様である。ベトナムにおける空手は、日本人によって持ち込まれたが、ベトナム戦争を契機に国際社会との関係が途絶えるころに、弟子たちがベトナム各地で指導を始めるようになると、ベト

ナム人指導者の積極的な解釈によって、日本とは異なる空手に対する理解が生み出されていった。その読み替えは空手の身体技法にもさまざまな変化をもたらした。しかしながら、ベトナムの空手の特徴の一つとして、精神的な修養を強調する点では、日本の空手の特徴の影響からは完全には逸脱していない。それは前述したブラジルに伝わった柔術に比べ、日本との地理的、あるいは文化的な距離が近く、また、日本に関する情報がある程度一般的に共有されている土壤があることも関係する。そこには、空手を伝えた日本人師範や空手を生んだ日本の威光に対する一定の評価が存在している。しかも、空手が単に格闘術にとどまらず、精神の修養に意味を持つという部分において、ベトナムの場合はそのまま受容している。その上で、その精神性の内容について、ベトナム人が受容可能な、ベトナム流の哲学的な価値あるいは礼節へと変容がもたらされたのである。そのような日本文化の影響が効力を維持できる距離感のため、技術的な変容にしても、時として日本からの映像や、実際に日本で学んだ経験を有する師範などに対する文化的正当性は無視されることはなく、折に触れ日本の空手との接触によって大きくゆり戻される現象がある。

もう一つの変容のパターンとしては中国の武術にもたらされた、技法的な変容が特徴的である。中国の武術、とりわけ太極拳は、少なくとも過去 300 年間の間に少しずつ変容が生じ、もともとは一つの形、流派であったものが、現在では大きく異なる 5 つの大きな流派と、さらに細かい多数の型式に分かれている。現在ではそれぞれの流派間でも、その技法は別の武術のように異なるものになってしまっている。しかしながら、ここ 50 年の間に生じた新たな変容は、さらに大きく異なるいくつかの太極拳

を創出した。その一つが、80年代以降に作られた「42式総合太極拳」といわれるものである。当時、世界に広がりつつあった太極拳の課題として、異なる形に分派していたために、国際大会などで競い合い、評価することは困難になってしまっていた。それは、世界大会などの種目に採用される上での障壁ともなっていた。そこで、5つの流派の技法的な内容を併せた「42式総合太極拳」が創出されることになった。その結果、太極拳自体が国際的な大会の種目になることで、認知度を高め、より広い普及を促す結果をもたらすことになった。その後の太極拳の世界的な普及がその恣意的な変容が功を奏したことを証明している。この成功経験から、太極拳は、再度、北京五輪の際に正式種目として採用されることを目論見、「難度太極拳」というよりビジュアルに訴えるスポーツ太極拳を創出した。それは太極拳本来の格闘術としての機能や技術の確認すら困難なものとして、古くからの実践者らの批判は少なくなかったが、太極拳の発展、中国発の種目の採用という目的の前に無視されてしまった。この本来有していた競技特性さえ捨てた「難度太極拳」という変容の創出をもってしても、太極拳がオリンピックの正式種目に採用されることはなかったものの、このような現代における変容事例によって、個別の武術自体の社会的発展を企図して自ら意図的に変容していく一つのパターンが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

谷釜尋徳、柔道の普及と変容に関する研究 - グレーシー術に着目して -、スポーツ健康科学紀要、査読なし、13巻、2016、15 - 43

谷釜尋徳、柔道の普及と変容に関する研究 - グレーシー術に着目して -、東洋法学、査読有、58巻1号、2014、238 - 226

石井隆憲、小豆島合気道調査報告-トルコと日本における合気道稽古の比較の視点から-、アジア文化研究所年報、査読なし、48巻、2014、253-262

石井隆憲、トルコ・イスタンブールにおける合気道の伝播と現状-その覚書-、アジア文化研究所年報、査読なし、47巻、2013、23-30

谷釜尋徳、柔道の普及と変容に関する研究 - グレーシー術に着目して -、東洋法学、査読有、56巻3号、2013、65 - 76

〔学会発表〕(計 3件)

石井隆憲、トルコにおける合気道の伝播と変容、日本体育学会(特別講演)、2013年8月28日、立命館大学草津キャンパス

石井隆憲、ベトナムにおける空手の伝播と変容-当事者たちの語りから-、日本武道学会(特別講演)、2012年9月6日、東京農工大学小金井キャンパス

石井隆憲、ベトナムにおける鈴長空手の形成、日本スポーツ人類学会月例研究発表会、2012年7月20日、立命館大学サテライト教室

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木内 明 (KIUCHI, Akira)
東洋大学・ライフデザイン学部・准教授
研究者番号：70298181

(2) 研究分担者

谷釜 尋徳 (TANIGAMA Hironori)

東洋大学・法学部・准教授
研究者番号：40527933

(3)研究分担者

石井 隆憲 (ISHII Takanori)
日本体育大学・保健医療学部・教授
研究者番号：70184463